

サマンバヤ通信

サマンバヤの会 THE GROUP OF SAMANWAY

インドの子どもたちの教育のために
for Education to Every Child

CONTENTS

2007 年上期送金完了のお知らせ
2007 は日印交流年！7月のイベント「スゴイぞ！」インドア/舌で感じるインド/インドの街角から（ホーリー祭）/大橋正晴 謹録



ホーリー祭（4ページ参照）に参加してきて顔中ペイントだらけの欧米人たち（2006.3）

2007 年上期送金を完了のお知らせ

2007 年 4 月 9 日に Bank of INDIA 東京支店発行の送金小切手により送金を完了しました。サマンバヤ・アシュラムに対して 30 名分（昨年上期実績マイナス 10 名）の養育費で、現在登録されている里親会員 25 名分プラス 5 名分プラスアルファの寄付という形にしました。

$30 \text{ 名} \times \text{Rs.}2,600 - (\text{半年分}) = \text{Rs.}78,000 - \text{送金額} = \text{Rs.}80,000 - = 232,000 \text{ 円}$

里親会員 25 名分の名簿とともに送付しました。当日レートは 1 ルピー = 2.90 円でした。

昨年度よりも、また少し支援額を減らしましたが、今後も里親がいる限り継続的にサマンバヤ・アシュラムとその卒業生たちの NGO 活動を支援していきたいと考えています

《2007 年は日印交流年！（Japan - India Friendship Year 2007）》

1957 年に締結された日印文化協定の 50 周年を迎えるにあたって、2006 年 12 月 14 日、日本の安倍晋三内閣総理大臣とインドのマンモハン・シン首相によって、「日印交流年」の開始が東京で宣言されました。

日印交流年のロゴマーク



学術、文化、ビジネス、青少年の各分野での交流が 2007 年に実施され、インドに於いては「日印交流年」、日本に於いては「インド年」として相互に実施されます。インド文化評議会（ICCR）と駐日インド大使館が協力して、一年間に及ぶ日本での「インド・フェスティバル（インド祭）」を展開します。（外務省 HP より）

ICCR は年間を通して、インドの様々な音楽・舞踊の中でも優れたグループを毎月 1 つ～2 つ日本に派遣する予定ですので、通信では随時イベントの情報を載せていきたいと思えます。

4 月のイベント

4 月は、インド 7 大古典舞踊の一つであるクチプディ舞踊公演が行われます。

クチプディ舞踊とは

インド 7 大古典舞踊の一つとして知られているクチプディ舞踊は、アンドラ・プラデーシュ州のクチプディ村を発祥の地とする古典舞踊です。

元来、男性のみの舞踊団による宗教的な舞踊劇でした。寺院付の踊り子デーヴァダシーや、民衆の間で活躍するプロの舞踊集団の影響を受け、手足や身体の表現、音楽、歌は創造的に、大変洗練されたものになりました。

踊りは、日本でも大変ポピュラーなバラタナーティヤ

ムに似ていますが、かつて始めに小さな幕のうしろで、登場人物を歌で物語るなど、カタカリに似た要素もある舞踊劇です。舞台芸術として演じられるようになったのは、1940 年代です。

公演スケジュール

4 月 19 日（木）	赤坂区民センター	東京
4 月 21 日（土）	善光寺	長野

5 月は日本の文化庁の協力により、マニプル州のマニプリ舞踊団が南は沖縄・与那国島から関東まで全国公演を行います。

イベントの詳細については **NPO 法人日印交流を盛り上げる会事務局**までお問い合わせください。

新潟県十日町市大池 ミティラー美術館（月見亭）内
 TEL:050-3415-7225 / FAX:025-752-6076
 Mail:info@mithila-museum.com

「スゴイぞ！」インディア

当会代表 寺田文男（TERADA Fumio）

インドで出会った「すごい」。今回は、冬のインド。インドのイメージといえば、カレー・象・暑い・タージ=マハルなどということになりましょうか。このタージ=マハルは、16 世紀半ばに、ムガル帝国三代皇帝アクバルが首都を置いたアグラに立つ建物で、1653 年に 22 年の歳月と莫大な費用と動員をかけて完成した皇帝シャー・ジャハーンの妃ムムターズ・マハルのお墓です。ヒンドゥーの国インドでありながら、ユーラシアからアフリカにかけて隆盛を極めたイスラムの遺産であるタージ=マハルをインドのイメージキャラクターにしているところは立派なものです。これというのもヒンドゥーの人々は、他の民族、宗教に寛容で遺物を安易に破壊することがなかったのが現代になって観光に使えたということなのではないでしょうか。それとも、首都がデリーに移転された 1638 年以降これまでの期間、イスラムが管理を続けてきた結果なのではないでしょうか。私には解りません。ただ、現在ここはイスラムの管理下にはあると推測しています。何故なら、イスラム暦を軸として運営されているようで、その休日である金曜日には見学はできません（以前は、金曜日は無料という時期もあったのですが）。世界遺産の指定、さらには大気汚染から建物を守るということでバッテリーバスを利用したパークアンドライド方式の導入等と文字通り建

物を取り巻く環境は日々変化しています。

冒頭「インドのイメージ」と書いたところからわき道にそれてしまいました。あくまでもインドのイメージには無いと思われる「冬のインド」が主題ですので、乱暴ともおもいますが「冬のインド」から仕切り直します。

2000年の年末、アシュラムに行きました。冬のインドは初めてだったので、寒さがどんなものか気になって事前にいろいろ調べたのですが、実感のあるデータや情報を得る事ができませんでした。暑いインドは語られることも多く、実際7月、8月は経験していたのですが、冬の暮らし向きや旅仕度のイメージがつかめず不安のままの訪印でした。

10月から3月が観光に適しているといわれています。雨も降らず、暑くないのがその理由ですが、観光地の大きなホテルならともかく12月、1月のアシュラムの朝は寒いこと。氷こそ張りませんが、お祈りが終わると毛布を頭からかぶり、暖を求めてたき火や竈（かまど）に寄って行ったものでした。そもそもインドの建物に暖房設備はなく、夏の暑さや湿度の高さに対処したものが一般的と考えられます。材料は大きく違うものの、日本の建物も夏を凌ぐためという役割が課されていることを考えれば、少々の寒さは「がまんがまん」ということなのでしょう。早朝の寒さをがまんすれば、やがてお日様が出て暖かくなってきます。上着を脱ぎ、セーターさえ必要でなくなるくらいです。

牛の背中に麻袋が乗っているのをよく見かけます。動物たちは寒さには強いはずですが、それを振り払うでもないところをみると1枚羽織っているとやはり暖かいのでしょう、飼い主の親心というのを感じるようで、大事にされているなと思うのであります。

さらに、深い霧の季節でもあります。乾燥しているはずの季節に霧というのも変な気がしますが、確かに霧がたちこめていました。気象の観点から説明がつくのかもしれませんが、これまた私には解りません。その霧のため視界が悪く列車が立ち往生して、ガヤ＝デリー間で10時間以上の遅れに出くわしたのですが、駅に停車したまま1時間、駅でもないのに停車したまま1時間、という調子で列車の旅満喫でした。確かに30m先が真っ白の壁といった状態で、のろのろ運転さえ困難なほどの深い霧でした。そんな霧でも空気の湿った感じがしなかったのが解せないのですが、これは個人の感覚的なものにすぎないということなのでしょう。そして、それほど深くは無いにしてもデリーでも、先出のアグラでもモヤのようなカスミのようなものがかかっておりました。少なくとも北インドの冬は霧が出るようです。しかも、乾いた霧という不思議な霧が。

舌で感じるインド ～パラタ～

山下真由子 (YAMASHITA Mayuko)

インドの主食といえば、ライスやナンを思い浮かべる方は多いと思いますが、去年9月の南インド旅行で私たちがハマってしまったインド料理の主食が、このパラタです。原料はチャパティーの粉です。これにたくさんのバターを加え、パイのように層をつくって焼きます。焼きたてのパラタは、クロワッサンのように風味豊かで、モチモチとした食感です。

さらにカレーを付けて食べると、カレーがパラタに馴染んでいい感じの味になります。特に南インドのカレーは比較的辛いものが多いので、パラタと一緒に食べるとその辛さも柔らかくなって、食が進みます。私たちはト

リヴァンドラムのレストランで初めてパラタを注文して以来、すっかりその食感の虜になってしまいました。「インドカレーと言えばナン!!」という感覚を払拭してくれた新発見でした。



右が山下真由子さん

インドの街角から ホーリー祭

東京農業大学3年 大畑朝義 (OHATA Asayoshi)



ホーリー祭の様子

今年の春もまた、インドの人たちはホーリー祭で異常なほど盛り上がったのだろう。ホーリー祭とはインド三大祭の一つでヒンドゥー教のお祭りのことだ。3月の満月の日に行われ、私が去年インドにいたときには3月14日当たりに行われた。ホーリー祭の悪い噂はインドに向かう前から聞いていて、インドに滞在中はいつその祭りがあるのかを注意していた。そして、私たちがコルカタからプリーに電車で移動する日だと分かるやすぐに電車のチケットをキャンセルして、祭りの日はコルカタの泊まっているホテルで一日じっとすることにした。それほど私たちはホーリー祭の良い話を聞かなかった。マザーテレサのボランティア施設のシスターは、「ホーリー祭は無礼講のお祭りで、お酒やドラッグを飲んでいる人たちが大騒ぎをするから女性は絶対にホテルから出てはいけない」と言い、新聞でもホーリー祭での注意を促していて、カラーボール(色粉と水の混合物が入っている水風船)を人やバスやタクシーに当ててはいけないと書かれていた。しかし、村でホームステイをしていたときの村の子どもたちはホーリー祭をとっても楽しみにしていた。それはやっぱりインド人にとっては年に一回のはめを外せるとても楽しいお祭りだということだろう。

祭りの前夜、私は明日が祭りだと意識していたせいかコルカタの街の雰囲気はいつもと違って感じるように感じた。そして、日が暮れてからホテルに戻ろうとしたら、ホテルの前の通りで焚き火をしていて、前夜祭のような

ものが行われていた。火は人の背丈以上に燃え上がり、20～30人近いインド人が太鼓を鳴らしながら騒いでいた。それは異様な盛り上がりで、私は早くその場から立ち去りたい気持ちになった。しかし今考えると、前夜祭はホーリー祭当日に比べればはるかに穏やかなものだった。

そして当日、私はいつもよりも早めの7時ころに起きた。興奮して目が覚めてしまったのだ。もう祭りが始まっているのかと思って外に出てみると、人っ子一人いなく、辺りは静まりかえっていて、今日が祭りの日だとはとても思えなかった

私はホテルに戻ってから、前日に近くのカフェで買いためておいた食料を食べて部屋でゆっくりして、2時間ほど寝たり起きたりしていた。すると徐々に外が騒がしくなってきた。私は無性に見に行ってみたくなり外に出てみると、昨夜焚き火をしていた場所ですらでもない騒ぎが起こっていた。狭い路地に100人いてもおかしくないくらいの人が集まって、みんながみんな頭からつま先まで赤、黄、緑、青などカラフルな色をして、鼓笛バンドのリズムに合わせて踊って騒ぎまくっていた。騒いでいるのはインド人だけではなく、コルカタに観光をしに来ている外国人全員が参加しているのではないかと思うくらいたくさんの外国人たちがいて驚いた。私は、外国人旅行者たちは危険だと聞いている祭りには参加しないものだと思っていたが、そういうことはなかった。ラテン系の女性はとてもセクシーな踊りを披露して、ある日本人の男性は店の屋根に上ってビデオをビニールで守りながらこの騒ぎを撮影して、あとほとんどの外国人たち(女性も含む)はインド人と一緒にこの路地にあるものすべてを塗りつくす勢いで、色のついた粉を水と混ぜてカラーボールを投げあたりしていた。私はあんなにめっちゃくちゃになる勇氣はなかったので、遠めから見学している人たちの群れに混ざって写真を撮りながらこのはちゃめちゃんなインドのお祭りを見ていた。しかし、やはりきれいな格好のまま帰るといのは考えが甘かったようでヨーロッパ系の男性に無理やり顔を塗られてしまった。そして、最後に顔を赤くしていた子どもに写真を撮らせてもらってから帰ろうとしたら、撮った後にしっかりとお金を10ルピーほど取られてしまった。



写真を撮ったら Rs.10 (約 25 円) を要求した子ども

この日はホテルでじっとして何も無いはずだったが、結局、10 ルピーを取られ、顔を緑にしてインドのお祭りに参加するという一日になった。

次の日の朝、私が新聞を広げてみると、新聞はホーリー祭に合わせてバラナシで列車テロが起こったことを伝えていた。詳しい数は覚えていないが数十人の死者が出て、被害者の中には日本人の学生がいたと新聞の一面に頭と腕に包帯を巻いたその学生の写真が掲載されていた(日本では報道されなかったらしい)。そして、また数日後にはムンバイの公衆トイレで列車テロのときと同じ爆弾が見つけれ、爆発前に処理したということが外務省のホームページに載っていた。

コルカタでもこんな事件が起こっても不思議ではない。これらの事件を知ったホーリー祭に参加していた外国人旅行客は、みんな同じように感じたと思う。そして、参加した誰もがもうホーリー祭には絶対に参加したくないと思っていることだろう。



ホーリーを体験した日本の若者たち

**2007 年サマンバヤの会 新春特別公開企画から
大橋正明 講話録**

サマンバヤ通信編集部

本講話録は去る 1 月 27 日(土)サマンバヤの会の新春特別企画の際、当会の副代表で恵泉女学園大学教授の大橋正明がインドの NGO 活動の現状に関して話した内容のダイジェストである。これはあくまで速報的、概要的役割を果たしているため、文章に関する責任は全て編集部であり、大橋正明が責任を持って校正したものではないということを含め御了承願いたい。いずれ、大橋の目も通してサマンバヤの会のブックレットとしてまとめるつもりではあるが、今回の通信ではその概要を掲載していく。

インドの NGO の話から日本の国際協力の現状や、その規模、課題に関しても触れられており、我々にとって大いに刺激になるものである。続編にもぜひご期待願いたい。

【はじめに】

私、大橋正明サマンバヤの会の副代表で、主に国際協力 NGO の世界で生きています。恵泉女学園大学でも教鞭をとっています。

特に南アジアの NGO が、どういう状態にあるかということに焦点を当てています。どういう協力をしているのか、どういう援助・協力が望まれているのか、ということが結果として望まれるかということ。援助とは現状に手を加えることで、一回やったら終わりのものではないので、現状を知ったうえで援助のやりかたを考えなければならぬのです。援助の金とか資金とかも続かないといけないので、1 回やったらおしまいという場合も多いのですが、援助を仕事にしている人たちは、そこで、ずっと生きていくので現地の NGO やそれを支援する私たちは、どうやったらいいのかを考えなければならぬのです。

私は南アジア、特にインドとバングラデシュの NGO に特に焦点を当てています。私が理事をしているシャプラニールは、ここ早稲田奉仕園の地下に事務所がありますが、日本では比較的古い NGO として設立し、今年で 35 周年になります。およそ年間 2 億円くらいのお金を使っています。

今日は、要点をかいつまんで説明します。

【経済成長】

最近、インドや中国は経済成長の発展が著しいと言われます。皆さんが私の年齢になったら、インドや中国に出稼ぎに行くということになるかもしれません。インドと中国はこれからどんどん成長して、現在の「途上国」「先進国」という線引きは、ほとんど意味をもたなくなってきました。インドの1人当たりの GNI (Gross National Income) = 国民所得は 620 ドル、これに対して日本は約 3 万ドルです。ところが、日本とインドの PPP (物価水準を考慮して実感をともなってみた場合の GDP (Gross Domestic Product) = 国内総生産) を見るとインドは 2,800 ドルで、日本は 2 万円強 (200 ドル) 程度なので約 10 倍程度の差しかありません。

また、他の数字、いわゆる人間開発指数と言われるものも徐々によくなってはいて、南アジアはアフリカのサハラ以南よりも良くなり、最底辺国ではなくなっており、中位国となっています。しかし、インドの場合は 1 人 1 日 1 ドル以下の経済貧困、所得貧困がまだ 34.7% を占め、バングラデシュとともにまだまだ貧困層が多い現状にあります。

南アジアを見る場合は必ず女性の地位がどうなっているか、あるいはジェンダーに注目する必要があります。たとえば、女性国会議員が占める割合は 9.3% で 9.9% の日本とほとんど同じですが、中等教育は男性に比べて 70%、平均余命は世界に比べて低いので女性の地位が低いことがわかります。また、男性に対する所得割合は 0.38、日本も 0.46 であり良くありませんが、南アジアはやはり女性のことをもっと考えなければなりません。

【NGO事情の比較】

NGO という定義は難しいものがあります。サマンバヤの会も NGO ではありますが NGO 法人にはなっていません。インドの場合は基本的に政府が強いので、NGO と呼ばれる団体は全部登録されています。外国からお金を受け取る団体はおよそ 3 万団体あります。

NGO が増えた時期は 1985 年 (昭和 60 年) くらいで、皆さんが生まれたころかもしれませんが、それまではインド政府にとって NGO は敵であって、反政府的な人た

ちの集まりだと思われていました。1985 年くらいから、政府は NGO が仲間であるということに認めたのです。それにはいろいろ政治的な理由があるわけですが、他の南アジアの国と比べると、インドだけが NGO に対する政府からの補助金を豊富にもっているのです。ここはいわゆる途上国と違うところで、NGO に対する補助金制度を独特にもっています。

外国からお金を受け取ることに對しては 1974 年 (昭和 49 年) 頃から非常に厳しくコントロールされるようになったのです。サマンバヤの会も、事前に許可がないと向こう (インド) の人たちはお金を受け取れないのです。だいたい 3 万円とか 4 万円以上のお金が動く場合、外貨の流れに対する規制が厳しくなります。インド政府は外国からの NGO はいりませんという態度をとっていて、なかなか現地に事務所を開くことはできません。これは、バングラデシュとかネパールとは対照的です。パキスタンも比較的似たようなタイプになります。

一般に、ネパールやバングラデシュで NGO (大規模な) に就職する人は「金持ちだね」と言われますが、インドでは NGO に就職すると貧乏だねということになります。それぞれの国によって (日本も含めて) NGO の経済事情が違います。

インドでは NGO 職員の人たちは安い給料で、つぶれはしないが、それ以上経済的に豊かにはなれないというような状態が続きます。また、外国から援助を受け取ることに對して批判的な人たちが多いということは面白いことです。外国から資金をもらっていることが「裏切り者」というイメージとつながるからかもしれません。いくつかの NGO は意識的に外国からの援助を受け取らなかつたりもしています。日本の場合、日本政府からお金をもらうよりは外国から受け取ったほうがまだましだというような雰囲気がありますが、インドでは、それは認められません。それが国民性なのです。

また、最近の学生にはわかりにくいかもしれませんが、社会運動家、たとえばダムを造るときに反対したり、木を切るときに女性が体をくくりつけて反対したりするような人たちからも NGO は裏切り者だと言われることがあるのです。社会運動は状況に応じて活動しますが、NGO はプロジェクト (予測する) ことをやっていて、クーラーの効いた部屋でプロジェクトを立案すること

で、貧乏人の名前を語っているだけで、貧しい人たちの生活を結局はよくしているわけではないのだと理解されているのです。日本だとその2つが同じように見られてNGOはいいものだというイメージがありますが、インドの場合、NGOは貧しいうえに必ずしも役に立っていないと思われています。特に共産党の人たちはNGOを憎んでいるので、共産党が強い州ではNGOが盛んではありません。

最近のNGOの主なやりかたはself help group。この前ノーベル賞を取ったユヌスはマイクロクレジットがその代表です。バングラデシュはマイクロクレジットをNGOがやっているのが特徴で、私はこれに対して批判的です。これに対してインドでは、農民に対して普通の銀行がマイクロクレジットを出しているのが特徴で、普通の銀行が貸し出しを行っています。貸し出し先がself-help group(農民の人たちが集まってお金を作れば貸しだしを受けることができる)。NGOはself help groupを作ることが主な役割になっています。このような状況を見ても私は、インドは『NGO 大国』であり、先進国だと思っているし、日本はすごく遅れていると思うのです。それがどうしてかということは後で触れる余裕があれば触れます。

【NGOに対する法制度】

次にNGOに関わる法制度の話ですが、日本ではNPO法が1998年(平成10年)にできました。サマンバヤの会は登録を行っていませんが、インドの場合は1860年のイギリス時代にSociety Registration Act(協会登録法)という法律ができて、Indian Trust Act(インド信託法)が1880年にできました。インドのほとんどのNGOは、イギリス植民地時代にできた法律のどちらか、もしくは両方に登録されています。サマンバヤの会はこのTrust(信託法)の方に登録されています。この2つの違いについては多少の解説はできますが、皆さんはあまり関心がないでしょう。Trustには理事会があって、財産を管理しています。外国のお金に規制をかけているという話は、「FCRA」に関連しています。これ以上(1万ルピー)のお金を受け取る人はFCRAの許可をとらないといけないということです。インドのNGOは正式にはい

くつあるかわからないのですが2万~3万くらいはあるでしょう。

規模に関しては、バングラデシュにはBRACというNGOがありそれが一番大きなNGOです。その職員は7万人、年間予算は300億円くらいあります。これに対して日本の場合、日本のNGOが全部集まっても280億円くらいの予算規模です。

ちなみにインドのNGOはどのくらいかというと、1999年・2000年という総額で895億円の予算。経済大国の日本はわずかに280億円で、バングラデシュ1つのNGOで300億円の予算規模があるわけです。2004年・2005年になるとルピーの価値がそのときよりも2倍くらいになっていますから、1800億円くらいの規模になっているのです。皆さんは1万円を越えると「大きい」としか感じないかもしれませんが、指定カーストにもいろいろあるように、お金にも大きさの違いがあるのです。日本の政府開発援助は年間7000億円でどんどん減額しています。インドのNGOは年間で1800億円の予算。インドのNGOがいかに大きいか、日本のNGOがいかに貧しいかということ、日本はNGOに関して後進国だということが統計をみるとわかるのです。

NGOの資金源については、国際機関や外国政府、NGOなどが外国の資金とされています。国内の政府の補助金のなかで一番大きいのはCAPART、民間企業だとTATA財団が一番大きいのです。かようにインドは『NGO 大国』ということができてでしょう。

(以下次号へ)



レクチャーする大橋正明(1月27日)

サマンバヤの会とは

当会はインド・ビハール州にあるサマンバヤ・アシュラムに対して主にアウトカーストの子どもの教育のために、里親という形で資金援助をする窓口として活動している会です。里親といっても日本へ子どもを連れてきて、養育するわけではありません。養育費を負担して、インドのサマンバヤ・アシュラムへ送金することを意味します。1人の里親の申し出があった時点で、アシュラムでは周辺の家庭からアシュラムでの養育を望む子どもたちを受け入れます。その子どもに対して5年間、養育費を送ります。そして、その5年が過ぎ、さらに5年間を子どもはアシュラム内の農作業などをして生産の助けをしながらアシュラムで生活をします。そして、「卒業」ということになります。養育費はアシュラムの財政の中に繰り込まれ、その中から子どもたちへの諸費用を出していくという仕組みです。

サマンバヤ・アシュラムとは

サマンバヤ・アシュラムはガンディーの高弟の1人、ピノーバが創設し、その弟子の1人であるドワルコ・スンドラニ氏が中心となり、その運営にあたっています。インドには「アシュラム」という組織があります。アシュラムとはヒンディー語で直訳すると「同等の仕事」となりますが、「精神修養の場」とか、ある種のセンター的役割を担う組織を指したりします。サマンバヤとはヒンディー語で「調和」とか「融合」などを意味します。英語では「harmony」にあたります。つまり、サマンバヤ・アシュラムは「調和のための修養道場」となりますが、インドの、そして地球に住む全ての人類の調和を目指す研修施設と言えるでしょう。サマンバヤ・アシュラムでは、子どもの教育こそが未来のインドの開発のためになるという考えの上に立ち、身分制度の為に抑圧されているハリジャン(付加触民)の地位向上のために、その子弟の教育に重点を置いています。

入 会 案 内

里親会員

サマンバヤ・アシュラムが養育する子どもの資金を援助します。
 里親会員に登録されますと、サマンバヤ・アシュラムは養育すべき子どもをサマンバヤ・アシュラムに連れてきて養育を始めます。
 5年間はその子どもの養育費を里親会員が保証することとなります。
 お支払い方法 5年一括 120,000円
 1年ごと 2,4000円
 半年ごと 1,2000円

いずれかの方法でお支払いください。

会費のうち、1年あたり1,4000~1,5000円(120USドル相当)をサマンバヤ・アシュラムに送金し、残りをサマンバヤの会の運営費用に充てます。サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

賛助会員

サマンバヤの会の活動を資金面で支え、応援していただきます。
 会費は1口5,000円/年で、サマンバヤの会の運営費用に充てます。
 サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

入会方法

入会のきっかけ、経緯、電話番号、さしつかえなければ職業、Miss,Mr,Mrs,Msを記入して入会申し込み書として本部宛に郵送またはFAXしてください。
 会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。
 入会の確認がされたことを通知します。
 会員証は発行していません。

継続の場合

会員として継続される場合
 会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。
 入会の確認がされたことを通知します。

退会

会を退会する場合、速やかに文章で(郵送またはFAX)お送りください。

郵便振替口座 番号 00260-3-15712

名称 サマンバヤの会 宛

編集後記

桜の花はもうすっかり散ってしまい、これからは夏に近づいていく一方です。私は一足先に夏を感じるべく、今月末から鹿児島に行ってきます。農業実習がメインですが、知覧町の知覧特攻平和会館も見てくださいと思っています。そこで、少しでも日本の歴史を学ぶことができたらと思います。

O.A

発行：2007/04/08(隔月第二土曜日)
 発行人：サマンバヤの会
 本部：〒299-4423 千葉県長生郡睦沢大上 3615-3
 TEL-FAX：0475-40-9795
 東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 5-1-16
 NP-ビル 5F 東大教育研究所内
 TEL：03-3815-3035 FAX：03-3818-1219
 印刷：株式会社ラティオインターナショナル